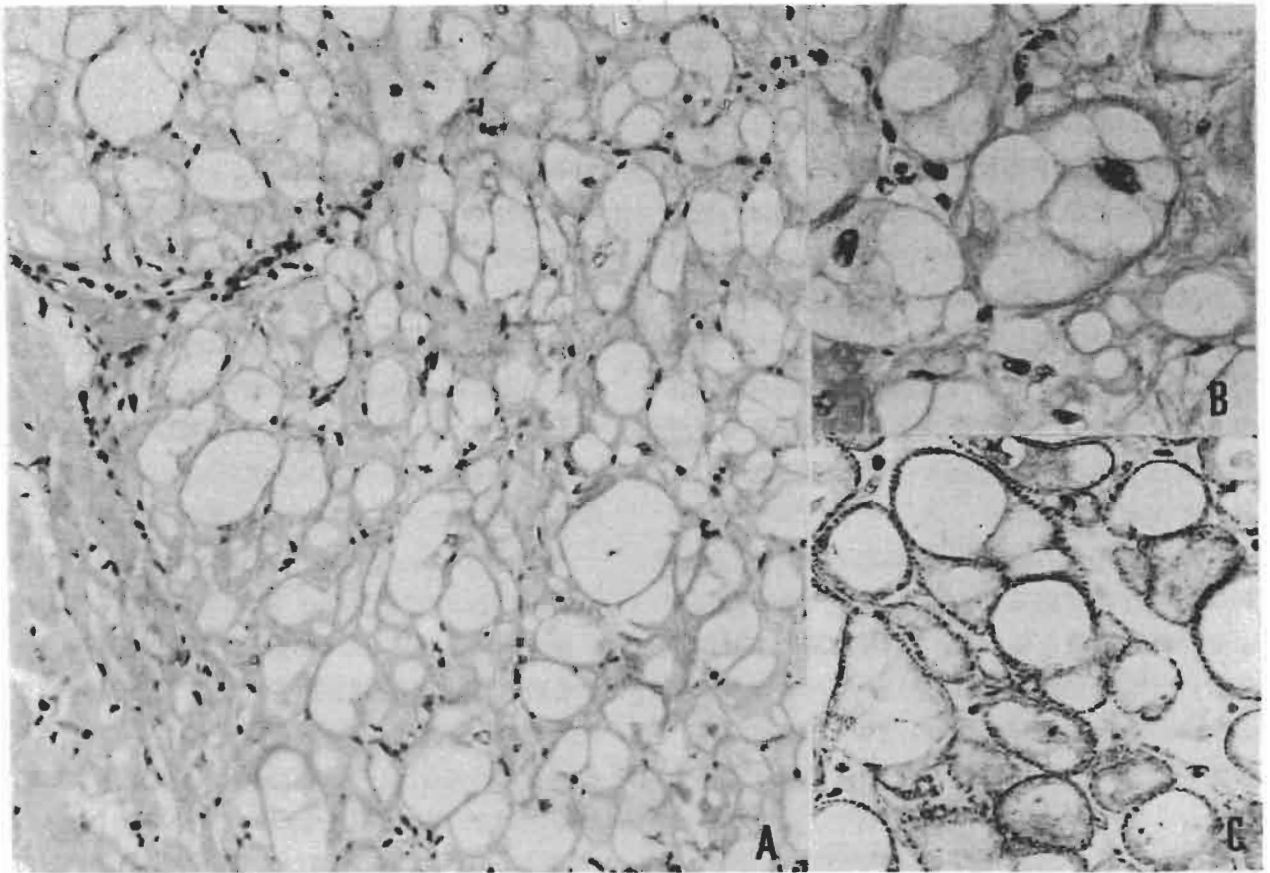


豚の心臓

麻布大学 秋田県中央食検出題 第29回獣医病理学研修会標本No.511



動物：豚，雑種，去勢，6ヵ月齢。

臨床所見：特記事項なし。

肉眼所見：右心室心外膜面にわずかに隆起する黄色，大豆大結節が認められた。剖面では心筋との境界は明瞭であったが，周囲に数個の粟粒大の結節を確認した。この他，肝臓には，胡桃大の結節性過形成と寄生虫性肝間質炎，肝リンパ節の腫大が認められた。

組織所見：病変は多発性で，顕微鏡的な小さい結節から肉眼で容易に見出せるものまであったが，いずれの結節も，HE及びPTAH染色で淡染し，被膜は欠くものの周囲組織との境界は明瞭であった。結節構成細胞の著しい空胞化のため結節部は弱拡大ではレース編み状を呈していた(Fig.A, HE染色)。これらの細胞は，一般に大型で弱好酸性の細胞質と多くの大小の空胞をもっていた。中には，高度の空胞化のため細胞質が周辺にのみ存在するものや，核の周囲に細胞質が突起のように残り，いわ

ゆるSpider cell (Fig.B, HE染色)の形態をとるものも散見された。ときに二核のものも認められたが，核分裂像はなかった。また，空胞によって細胞質を占拠された細胞の縁には，筋原線維が破線のように見え(Fig.C, PTAH染色)，縦断された部分には，横紋が観察された。PAS染色によって，空胞内に大量のグリコーゲンが証明された。

以上のことより，結節の構成細胞は，大量のグリコーゲンを保有する心筋細胞と考えられ，本例をいわゆる豚の心臓横紋筋腫と診断した。

本腫瘍は，モルモットや豚などに多く報告され，アメリカでは，豚の好発腫瘍の一つとされているが，日本での報告例はごく少数である。また，一時期，糖原病の一分症あるいは真の腫瘍として報告されてきたが，現在では心筋細胞の限局性発育異常すなわち過誤腫と看做されている。